

サヨナラだけが人生さ

杏里の「オリビアを聴きながら」をきくのが今でも嫌いだ。♪出会った頃はこんな日が来るとは思わずにいた。いいえ済んだ事、時を重ねただけ。疲れ切ったあなた私の幻を愛したのー。幻？

君と出会ったのは東京の大学の同じクラス。入学前のオリエンテーション伊豆旅行に君の姿はなかった。後で君はシャイで緊張で体調を崩し来られなかったと知った。7月になってクラスの皆で日光に旅行に行ったが、君は旅館で一睡もできずに朝、友達と二人で帰っていったね。

僕は気になって大分に帰って横浜の君に長い手紙を書いた。君から返事が来て、何回か手紙をやりとりしながら僕は君が好きになって、やはり長い告白の手紙を書き、やがてつきあい始めた。

ほぼ毎日、僕は君の住んでいる横浜の相鉄線の駅や君の家まで送っていた。君のお琴の会や人形劇「よだかの星」（よだかは最後に太陽に焼かれ星になってしまうのだ）をききに行った。明治神宮、代々木公園、横浜の港、鎌倉もよくデートした。東京近郊の山にも登った。お弁当は君のむすんだおにぎり。僕が8コで君が2コ。笑いながら食べたね。

卒業して君は〇しに僕はバイト生活。いつのまにか臆病だった君は

快活になり大人になった。少しは僕も役に立ったのかな。

僕は歩くのが好きだったので、山手線を一周したり東京から鎌倉まで60キロ10時間かけて歩いた。終点で君は風変わりな僕を待っていた。こんな僕を認めてくれていた。バイト帰りやバイトの休みの日の夕方、僕は東京駅の八重洲口で君を秘かに待ち、君を見つけては君の後ろ姿に「安！」と声を掛け、驚きと喜びの君の顔を見るのが楽しみだった。時には君に会えずに寂しく帰ることもあったが。そして相も変わらず君の家の前まで送って僕はきびすを返し帰っていった。その背中を君はずーっと見ていたそうだね。知らなかった。

25才の時、僕は君にプロポーズした。君はOK、でも君のお父さんに定職についていないと断られた。直後、僕はバイトをやめ一人悶々とし一時帰郷した。心配した君は大分までわざわざ来てくれたね。嬉しかったが、僕は君を幸せにする自信がなくて。2月、僕は結んでいた君の手をついに放した。

26才の5月のある日の午後、僕は東京駅のホームにいた。君の会社に電話し君に「もう会えないね」と言った。君は見送ろうと言ってくれたが、僕は「いや、もういいよ」と断った。人生最愛の人との別れだった。

その後、君は山好きの同僚と結婚し3児の母。僕はバツ2で今は独身。人生に後悔はつきもの。いや、サヨナラだけが人生さ。